

## ほっと新潟が新潟日報の取材を受ける ～訪問介護の現状を語る～

5月8日(水)、新潟日報社の記者さんが、有限会社カイツほっと新潟の取材に来所しました。この取材は、3/28に県連担当者が新潟日報社の取材を受けており、この際に「現場の実情を知りたいので、事業所を紹介して欲しい」との希望があり、今回の取材につながりました。

5/8の取材には、ほっと新潟からは4/26厚労省交渉に参加した事業所管理者ら4人と有限会社カイツ取締役社長も参加しました。

### (以下、印象的な発言です)

○今回の改定で報酬がアップしそうだったので、職員には「給料をあげられそう」と伝えただけだった。それがまさかの引き下げ。ヘルパーが足りていないのに、報酬を下げるとはどういうことだ！と思った。黒字率が高いというが、まわりの事業所は黒字の事業所は少ないのが実態で、それも小さな事業所ばかりで、今回の加算取得のための書類整備等は難しいのではないかと。それで収入が下がり、給与を上げられず人を確保できず、廃業することになるのではないかと。そうすると利用者の行き場がなくなるのではないかと。

○訪問の依頼件数は増加しており、今は新規依頼も断らずに受けている。スタッフ確保もなかなかできなかったが、この1～2年でスタッフも増えてきた。しかし若い人は来ない。訪問介護の魅力ややりがいを伝えきれていないのか。

○今月の単位数をカウントすると、減っているのは分かる。やっていることは同じなのに。納得できない。

○加算を取得するための様々な整備が、間違っていないか不安。不備での減算が怖い。全員現場の人間なので、日常業務の合間が大変。

○やりがいはある。感謝の声が直接聞けること。それがあから続けられる。自分は施設での勤務経験もあるが、自宅で暮らす人が生き生きとしているのを感じる。

○訪問時に気付いて助かった人もいる。また訪問を開始し、家族から「本人の意欲が感じられた」と聞くと、自分たちは専門職なのだと感じることもできる。

### (日報社からの今後の希望)

- 介護の現場を見せて欲しい  
→実際の訪問現場を見て頂くことにしました
- 経営実績の変化を知りたい  
→近日中に実績が出るので、協力することをお伝えしました

